

もくじ

文化遺産調査の日常—琳派の花園 あだち展への道— P1

あだち民具図典⑬ 斗拵… P3 協働展「足立の学童疎開」を終えて… P4

足立史談

第655号

2022年9月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



文化遺産調査での調査研究の一場面

江戸文化と郷土史の研究者、勝村英世氏と美術担当の学芸員が一つの作品を熟覧しながら検討を進めているようです。

1 調査にうかがう博物館

文化遺産調査特別展「琳派の花園 あだち」が来月9日(日)から郷土博物館で開催されます。展覧会の元となっている文化遺産調査事業の日常をご紹介します。

文化遺産調査は区内の個人の方のお宅、寺社等で行われていきます。まず美術や文化の遺産に関する情報をいただく博物館スタッフが資料を拝見します。

文化遺産調査の日常 —琳派の花園 あだち展への道— 郷土博物館

数点の場合もありますし数十点から数百点にのぼる場合もあります。量が大きい場合にはお許しを得て、いったん博物館でお預かり

して調査研究を行い、所蔵者の方には後日ご報告することもあります。

2 調査と展覧会

文化遺産調査は平成二三(二〇一一年)一月、翌二四年に控えた区

区内寺院調査のようす 点数が多い場合、数日間、調査場所を提供して頂くこともございます。



制八〇周年の特別展を目的にスタートしました。くしくも同じ年、千住仲町の若田家などの家々から見いだされた美術資料を中心に企画展「千住の琳派」を開催しました。

この二つの事業は、もともと別々で、調査もいったん終了しましたが、一つになっていきます。文化遺産調査成果を踏まえ、平成二五年度に開催した特別展『大千住 町の繁栄と祝祭』展の影響は大きく、二六年(二七年)には毎月のように所蔵者の方や区内の方から情報が寄せられ、美術や文化資料の新確認が続きました。



解体中の旧家から美術資料を取蔵したところ。左の3名の方が足立史談会の方々。平成23(2011年)4月

日々、資料所在の連絡があり、「明日、むかしの建物を解体するから見に来て」といった緊急調査もしばしばでした。

そこで二七年度から第二次の文化遺産調査という一つの仕事として調査が再開しました(現在も継続中)です。

平成二八(二〇一六)年の『美と知性の宝庫 足立』展以後は、江別の船津家、花畑の千ヶ崎家、千住の名倉家、中央本町の日比谷家や千住の石出家と、次々に見出された美術

文化資料の発見報告展が中心となりました。

この間、琳派絵師や谷派の作品への理解や情報蓄積が深まっています。

3 郷土史と専門家のチカラ

資料の新確認や調査研究、取蔵は、所蔵者の方から直接ご相談がある場合のほか、大きな契機になっているのが足立史談会をはじめ多くの郷土史愛好家や町の歴史に関心のある方からのご紹介です。

博物館の中だけでは、町の資料情

報は限られていて、

多くの方のご協力により、はじめて調査が行われます。所蔵者の方と史談会会員さんが親交を結んでいて取蔵に結び付いた例や、足立区の町会関係者の方からの情報が契機となった例もありました。

新たに確認された美術や文化の資料は、いずれも初めて所蔵先から外に出ることがほとんどで、絵師も作品も、参考図書がある例は、ほとんどありません。

そこで専門家の先

生と博物館による調査

研究会を開催し、資料

内容を明らかにして

きます。複

数の専門家

の熟覧調査

を経て、内容が吟味され、展覧会

に結実して

いきます。

そして展覧会で新たに情報もたらされ、さらに新たな資料に結び付いていきます。

*

現在、文化遺産調査の対象は合計五〇件を超え、うち二〇件余が終了、現三〇件近くが調査継続中もしくは未着手となっております。

ところで所蔵者、紹介者、博物館、そして研究者ともに、確認された美術品も文化資料も「足立の歴史、文化、共通の遺産」として後世に伝えたいという意見で一致しています。中にはご寄贈頂き、現在、郷土博物館所蔵の作品も多くなりましたが、いずれも無償提供です。もちろん所蔵先で保管され続けた資料もあり、今後の文化遺産の継承も所蔵者をはじめ区民の皆さんと博物館で担っています。



二つの琳派作品も一つの展覧会で初登場。村越向栄「八橋図屏風」(当館寄託) 中野其豊「十二月農耕図屏風」(当館蔵)

4 琳派の花園あだち展

今年の十月九日(土)から開催する特別展「琳派の花園あだち」展は、これまでと趣が異なり、千住の琳派をめぐる諸作品をご紹介するテーマ展覧会です。これまでの文化遺産調査展覧会は、調査報告という側面が中心でしたが、気づけば「千住の琳派」展以後、蓄積が進み、琳派作品をまとめてご紹介する機会がありませんでした。

そこで区制九〇周年を記念し、琳派の諸資料を招来して開催いたします。展覧会の詳細については『あだち広報』でご紹介する予定ですので、ぜひご覧ください。

(博物館学芸員 多田文夫)



あだち民具図鑑 15
とます
斗枘

■枘(ます) 枘は、水や酒などの液体や、米や麦、豆などの雑穀の量(体積)を量る道具で、木製の立方体(四角い)のものが頭に浮かぶかと思いません。

斗枘(とます)は、穀物、とくに米を量るために使用された道具で名前のとおり一斗入る枘です。一斗はおよそ一八リットルですが、尺貫法における体積(容積)の単位で、十合が一升、十升が一斗、十斗で一石となります。米や酒を量る単位として現在でも使われています。

■弦鉄枘 斗枘が使用されたのは、とくに米を俵詰めするときで、玄米まで調整した米四斗分を一俵として米俵



【写真1】斗かき棒と弦鉄枘(下に空いた空間に手が入られる)



【写真2】丸型一斗枘
【写真3】丸型一斗枘の印

に入れるためです。江戸時代に描かれた四季農耕図を見ると、この四角い斗枘【写真1】が描かれているのを見ることが出来ます。写真のように四角い斗枘のなかには、対角に弦鉄(つるがね・げんてつ)、弦掛け(つるかけ)などとよばれる金属製の斜めの棒がつけられています。そのため、この形態の枘を弦鉄枘(つるがねます)ともよびます。弦鉄は、米を入れたときに正確に量るために、斗かき棒(とかきぼう)を転がして上部を均すときの作業をしやすいするためのものです。この枘の形を記号にしたものが「ます記号」とよばれるもので「□」と表され、「○○あり□」のように、略字として使用されています。

積が容量に見込まれておらず、かつ、弊害があるということで、明治八年(一八七五)に改正され、弦鉄は明治三六年(一九〇三)以降つげなくともよいとされた。(農林水産省データベース アグリナレッジ)とのことです。

そのため、現在残されている弦鉄のある四角い一斗枘は比較的古く、江戸時代からだいたい明治時代までに製作された道具と考えられます。

■丸型一斗枘 斗枘には、【写真2】のように円筒形のものもあります。その形態から丸型一斗枘。丸斗枘ともよびます。

農水省データベース アグリナレッジによると、丸型の一斗枘は、「明治四二年以後に製作されたもので、昭和三年末にメートル法に統一されるまで用いられたものである」といいます(注)。そして、直径と高さ統一した規格品であるため、横についた持ち手が金属製か木製かに違いはありますが、そのほかは、ほぼ

同じものになります。各地に製造業者があり、広く流通したようで、業者の社印(商標)や検印が焼き印で押されています。

そのなかのひとつに、「東京(斗枘の形のなかに)城」の印があります【写真3】。当館の収集した丸型一斗枘五点のうち、この印の押されているものは三点、「岐阜」の印のあるもの二点、不明一点であり、「東京」という焼き印からも、これは比較的近場で製造されたもので区内に広く流通していたことがうかがえます。

「城」は、おそらく「城東」、「城北」といった宮城(きゅうじょう・皇居のこと)から見て東、北などといった地域を表す言葉で、それが社名となった会社を表す「城」ではないかと思われる。

一方、岐阜県産のものもあり、この時代には、地方で製造された道具が流通に乗り、かなり遠方まで広まっているということがわかります。

■呪物・縁起物 前回紹介した箕と同様に大切な穀物を入れる枘は、穀霊の宿る、あるいは心霊を招く神聖なもの、呪物(じゅぶつ)とも考えられました。一升枘は、餅や団子などをに入れて神仏に備える容器として使われたり、また、枘の底を叩いて、迷子を捜したり、体が弱って昏睡状態になった人の魂を呼び戻したりするために使うという俗信があり、特

別な道具として使用される事例がうかがえるのです。

穀物を均すために使う斗かき棒についても、北陸地方では、斗かき棒に似た形状の餅を「斗棒餅(とほもち)」とよんでいます。単に形が似ているだけではなく、杵と同様に穀霊に関わる縁起物としての名称と考えられます。新潟県魚沼市では、八十八歳の祝いを迎える人は、男性は斗かき棒を、女性は米を入れる袋を手作りして、お祝いのお返しに配るといふ慣習がありました。これも米の力による招福や豊作、家の繁栄をもたらす縁起物として期待されているからでしょう。

飲食店が「一斗二升五合」と書いて「ごしようばい、ますますはんじょう(一斗は五升の倍、一升は杵がふたつ、五合は一升の半分なので)」と読ませるものを見ることがあります。単なるだじゃれや酒つながりというだけではなく、杵自体が縁起物であるということにも大きな意味があることと考えられます。

(博物館学芸員 荻原ちとせ)

(注) 昭和三十三年(一九五八)はメートル法が完全実施され、公式に尺貫法を用いることはできなくなった。丸型一斗杵の製造を、明治四十二年以降であるとする理由が確認できなかった。

協働展「足立の学童疎開」を終えて

七月二〇日から八月二八日まで、足立の学童疎開を語る会との協働展「足立の学童疎開」を開催しました。例年、八月上旬に、区役所アトリウムにて開催される平和事業に参加していましたが、コロナウイルス感染防止対策のため二年間開催できず、今年も開催ができない状況でした。

今回は博物館を会場として開催するため、当時の通達類、疎開先で記録されていた日誌など、教育研究所が収集した貴重な資料や疎開学童の自筆絵画の展示も行いました。

七月下旬からウィルス感染者が増加し、博物館の休館や、体験を語る事業の中止などもありましたが、これまで続けてきた活動をつなげることができました。

開催にあたって、疎開の体験者から



展示室の様子 体験者自作の疎開先寺院の模型を中心に



展示最終日に集まった学童疎開を語る会の会員

当時の生活を振り返って、簡単な質問に記入していただく、一番苦しかったことは空腹、そしてシラミ、寂しさなどがあげられました。そういったなかでも、楽しかったことをうかがうと、疎開児童の健康のために学習として薦められていたスキー体験、面会に親族が来てくれたことなどがあげられました。一方、「楽しかったことなどない」ときっぱりと書かれた方もいて、疎開生活全般に渡る厳しさがにじみ出る記載でした。

「あなたにとって『疎開の体験』とは？」の問いには、我慢強くなった、協力することを学んだ、と厳しい生活のなかで、その後の人生において役に立ったこと、大切に感じたことがあげられました。つらい体験も自分の糧(かて)にされた皆さんの心の持ちようがうかがえます。しかし、決してあつてはならないこと、二度と繰り返していけないこと、平和の大切さ、そして、この体験を伝える必要がある、ということ。皆さんが答えられており、この会の発足時から変わらない皆さんの思いを再確認させられました。

郷土博物館